

Kikuchi Mitsuyoshi

菊地広祥

—— 介護施設で陶芸を教える

喜寿（七十七歳）からの出発

|| 新骨壺の囁 ||

青山ライフ出版

装丁 / 溝上なおこ

はじめに

日本経済新聞には、私の履歴書という長寿ベストセラーがある。それも一ヶ月でその人の半生を終わるよう設定されているので、書く方も気楽に筆を進められるし、読む方もいつの間にか読み終わっている。人生七十年もやっていると、そろそろ纏めるものも、まとめておかねばと思うようになる。

俵萌子著『命を輝かせて生きる』私の選んだ第二の人生』読んでいると、最後が「陶芸」を教えた、ことが書いてあった。

私は彼女には、三、四回お会いしている。最初は未だ産経新聞社にいた頃である。確か、加藤尚文氏の原稿取りの使いで、お会いしている。

次はずっと後で、

増穂登り窯、伊勢丹主催の『アマチュアぐい呑みコンテスト』で池田満寿夫氏、浅野陽氏等とともに審査員の一人となっていた。

次が池田満寿夫氏が亡くなった直後、赤坂のキャピタル東急で私が『骨壺展』開いた折。

次には、生きがい彩の会主催で講演会の講師に来てくれたとき。

最後は妻と行った赤城山の彼女の美術館。

いま私は、埼玉県内の二、三の有料介護施設で、生まれて初めて「粘土いじり」をしたという高齢者に、陶芸の素晴らしさを味わってもらおう仕事をしている。

今年（平成二十四年）の年賀状にそのことを書いたら、いま私が所属している亜細亜美術交友会の理事長の板越文雄氏から『陶芸をよく高齢者のためにお使いだ……』と励ましの賀状をお返し頂いた。

そこでそのことを軸に、私の来し方を書き記しておこうと思う。



右端が筆者。中央は俵萌子氏、左は荒木氏。「生きがい彩の会」講演にて

— 介護施設で陶芸を教える
喜寿（七十七歳）からの出発
|| 新 骨壺の嘯 ||

はじめに	3
生い立ちのこと	8
父親のこと	8
母親のこと	10
生まれて最初の記憶	11
小学校時代だけで転居歴十ヶ処	12
学童疎開（作並）の思い出	14
学童疎開（作並）思い出②	16
趣味の軌道（陶芸に至るまで）	18
趣味の軌道（陶芸に至るまで）②	20
趣味の軌道（陶芸に至るまで）③	22
労務管理研究会の時代	24

陶芸を始めたきっかけ！	26
新・骨壺の噺	28
友人の骨壺づくりに専念する	30
《自分の骨壺づくり》の講習会を開く	32
ホテルでも【骨壺づくり講習会】開く！	38
骨壺の噺	40
骨壺の噺②	42
骨壺の噺③	44
骨壺の噺④	48
骨壺の今と昔のはなし	48
介護施設のデイサービスで陶芸を！	52
介護施設のデイサービスで陶芸を！②	54

CONTENTS

生い立ちのいじり

父親のこと

私の本籍地は「東京都台東区浅草雷門二丁目二十五番地の七」が出生地の正式な住所表示である。ところが今、戦後の居住地変更で《雷門》という地番はない。浅草寺は、平安時代九四二年の創業とか。しかしこの地名が忘れがたく、家族の中で私だけがここを本籍にしている。

私の本当の出生地は、母親の話によると、東京の下町、京成押上駅（現在は東京スカイツリーが良く見える場所だろう）の路線脇で父親がやっていた《魚松》という魚屋の二階だった、という。

私の父親・要蔵（旧姓酬醒）は、山本周五郎の『青べか物語』で有名な浦安の漁師の男四、女三の三男坊として生まれている。しかし私には、あまり父親の記憶はない。何故なら私が十歳の時、昭和十九年赤紙徴用で満州に行ったまま戦死したからである。

しかし父親のすぐ下の叔父・熊吉の話によれば、漁師のくせに船酔いがひどく、しかたなく姉の亭主が大工ということもあり、大工の見習いになった。ところが義兄の死により、知り合いの氷屋の手伝いをしたり、自転車の荷台に鮮魚を積み行商したりしていたようである。

十五、六歳の頃の話だという。